

全国盲ろう教育研究会 会報 第5号

定期総会・研究協議会報告特集号

2008.1 発行
全国盲ろう教育研究会
事務局

全国盲ろう教育研究会 第5回定期総会・研究協議会報告

2007年8月9日(木)・10日(金) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所を会場に全国盲ろう教育研究会 第5回定期総会・研究協議会を開催いたしました。

特別支援学校の教員、福祉施設指導員、盲ろう児童生徒の家族、大学教員、研究者、医療関係者など76名(盲ろう児生・ボランティア・通訳者をのぞく)の方の参加がありました。

講演で大いに学び、実践報告に共感・感動し、8つのポスター発表に耳を傾けました。そして、分科会では時間を惜しんで語り合いました。また、ロビーに「点は語る」の展示コーナーを設けました。家族の方と参加した盲ろう児童生徒も手作りのウォーターベットやプールの心地よさをたっぴりと楽しんでいました。



実践報告「人と人とのつながり」



講演「おとなになった
先天性風疹症候群の子どもたち」



「点は語る」コーナー

研究協議会の様子をご報告致します。

全国盲ろう教育研究会 第5回研究協議会報告

< 8月9日 >

障害者権利条約について（会長挨拶より）

条約とは、国際法上で国家間で結ばれる成文法であり、国際連合等の国際機関も締結主体となりえます。日本では、国家が同意しているものは、公布され、日本国内では、憲法より下位ですが、法律より優先されます。

国家が条約に拘束されることへの同意を表明する方法としては、署名、批准、加入、受諾等があり、これらは締結と総称され、条約によって方法が若干異なります。

障害者権利条約は、昨年8月に国連で採択され、12月に国連総会で承認され、現在約100の国が署名をしました。日本はまだ署名していません（注）。署名したあと、各国は国内での批准の手続きをとります。20カ国が批准すると、この条約は有効となります。署名がすむと、早くて3年、遅くて5、6年で批准されるのではないかと思います。

世界で20カ国以上が批准し、日本も国会での審議を経て批准されると、条約として発効します。そうすると、障害者権利条約は憲法より劣りますが、他の法律よりも上位にきますので、他の法律は条約に則して修正されることになります。これが世界中で行われることになるのです。

日本の盲ろうの子どもたちの教育や生活にも当然大きな影響を及ぼしてきます。じっくり勉強して、この条約を強い味方につけるようにしましょう！

（注）研究協議会開催時には署名していませんでしたが、その後9月28日署名されました。

実践報告「人と人とのつながり ～埼玉の取り組みから～」

（以下に、実践報告の概要を掲載いたします。）

西村 晴美 氏

みなさんこんにちは。今回の発表では、MH君を中心に、様々な人がつながり、また次につながっていく様子をお伝えしたいと思います。見えない聞こえないという情報障害は、自分から人や物に関わっていくことは難しい...、しかし、盲ろう者を中心に、まわりがつながっている、いえ、本当は盲ろう者が、周りの人間をつないでいると言うことを、ご報告したいと思います。ご家族・学校・ヘリコプターの会などの様子をお話しながら、お伝えしたいと思います。

家族から

< 誕生 >

Hは平成2年7月に生まれました。

聴力は1歳当時、両耳共90dBで、就学年齢頃からは100dBを超えていま

す。目の病気、網膜色素変性症が分かったのは幼稚部2年の時でした。当初は網膜色素変性症とは診断されず、異栄養症で周辺網膜と黄斑部に変性があるとされていました。

< 早期教育の頃 >

1歳10ヶ月から大宮ろう学校早期教育に通い始めました。風邪をひきやすく、殆どお休みばかりしていました。

2歳の後半からは体調が安定し、学校に通う日数が増えました。補聴器をつけても呼びかけには反応がありませんでした。でも太鼓の音だけは分かりましたので、音が聞えたらお手玉を投げるとか、滑り台を滑るなど、遊びながらの聴能学習をやっていました。

当時の先生が、Hの歩き方に少しおかしいところがあると気づき、目の異常ではと医師に相談しました。すると、「少し見づらいかもしれない。暫く様子を見るように」と言われたのですが、定期的な検診には通いませんでした。

< 幼稚部の頃 >

幼稚部に入ると体調は安定し、殆ど欠席することがなくなりました。ただ、嫌だ！とか、もっとやりたい！といった感情が、他の子に比べて少ないのではと感じました。

幼稚部に通う中で、外遊び、特に遊具遊びが好きになっていました。でも、時間になると「はい。終わり」と教室に連れて行かれてしまっていたせいでしょうか、1年が終了する頃、一つの変化が現れました。朝、家の玄関を出ると、ゆっくりと後ろ向きで車に近づき、ゆっくり乗り込みます。でも、夕方、家に帰って来た時は、車から降りるとスキップをするよう元気に玄関に向かうので、ご近所さんからも「Hちゃん、朝と帰りでは、人が違うみたいね」と面白がられていました。私は、それがHの「嫌だ！」のサインとは全く気づきませんでした。

幼2になり、Hからは、朝、学校に着いた時も、「嫌だ！」のサインが出ていて、先生はすでに気付いていました。そして、朝、駐車場に着くのを待ち、プランコが写っている写真を見せて「ここに行こうね」と誘うことを考えてくださりました。教室にはすっかり満足してから入ります。それを毎日繰り返すことで、いつしか学校嫌いは無くなっていました。この時から写真を使うようになりました。

当時も、見え方の不安があった為、眼科で詳しい検査を受けましたが、はっきりした測定は不可能でした。

この頃、色の弁別に支障があることが確認できた為、キュードを諦め、簡単な手話を取り入れる様になりました。

外遊びが大好き、教室でやる勉強も楽しい、でもやっぱり「おわり」と言われるのは嫌な様子でした。それならばと、「かわるよ」と手話で伝え、教室の写真を見せると嫌がらず遊びをやめてくれました。それからは「かわるよ」がいろいろな場面で使えました。学校には次々楽しい事がありますが、家ではそうとばかりは行きません。もう食事の支度をしなければ。ずっと一緒に遊んでいられないのよ。私の近くで遊べるものに変えて欲しい。「これやめて、こっちで遊ぼう」と言っても中々聞き入れず、家では我がまま息子との戦いが始まりました。

幼3の担任となった先生の考えで、キュードの学習も少しずつ再開されました。キューサインは、時間を掛け、身近な物の名前をいくつか理解するようになっていました。

その後、キュードの口形文字の代わりにひらがなを使えばと考え、「あ」行の手はここ、「か」行の手はここと教えました。すると毎日、表の前に居ようになり、小学部入学前にひらがな50音が読めるようになっていました。

しかし、サインを覚えて単語を発信できても、受信の時、私の手の動きに目が付いて来ていないことに気付きました。手を繋いだままでキューサインを使い、口形だけ見させると良いのではと思い、母子の危なげな会話法がスタートしました。

<小学部>

入学当初、先生に理解して貰えなかったのが、手を繋いだままのキュードでした。「もっと、お母さんが沢山キューサインを使ってあげれば、必ず見るようになります」と言い、良く見えないことを聞き入れて貰えなかったのですが、1学期半ば頃になり先生も分かってくださいました。

2年生の1学期に中澤先生が学校を見学に来られた際、良く見えていないHを見つけくださり、初めて弱視難聴も盲ろうなのだ我知道了。その年度末に実施して頂いた合宿による教育相談で、キュードから触指文字への変更、文字は必ず同じ大きさの同書体の物を読ませる、書見台、拡大読書器を学校で使用するようにとご指導頂きました。

3年生になり4月、指文字が覚えられるだろうか心配しましたが、とてもスムーズで私よりも先に覚えてしまいました。拡大読書器は国リハのロービジョンクリニックで試してみましたが、文字を見るよりも機器をいじくる方に夢中でした。

4年生の頃、文字の読み書きは、とても難しくなっていると感じました。宿題の問題文を読んでいても、ところどころ読むことができない字があり、その都度尋ねて来ました。書くことも、最初は答えを枠の中に書いていましたが、徐々に枠からはみ出したり、文字が重なってしまうこともありましたから、常に横に居て、読めない文字を読んであげ、書くときも手を添えている状態でした。

この後、5年生から点字を学習することになりました。点字を覚えている時の姿は、とても意欲的で、ひらがなを覚えていた時、指文字を覚えていた時と同じでした。点字に変えて良かったと思いました。

<最後に>

もう少し見えていた時、何とかして、もっと色々なものを見せてあげていれば良かった、それを叶える為の努力が必要だったと悔やみもします。

でも、触指文字での会話によって、いつも先生が横に居て話しかけてくれる、話を聞いてもらえるという経験を、たっぷりできたと思います。当時の先生には感謝しています。

そして、触指文字会話は、手書き文字での会話の可能性も残してくれたと思っています。主人は、なかなかキュードも指文字も覚えられませんでした。Hと会話する事が出来ずに、気持ちを通じ合わずにいたのではと思える時期が長

くありました。でも、Hの言葉が増えてくると、お父さんが何を言ったのか、反対にHにどんな言葉で話せば通じるのかが、少しずつ分かって来た様で、今はお互いに幸せそうです。

もう一つ、障害ではありませんが、Hの病気のこと常にも常に頭の隅に置いています。

学校、ヘリコプターの会、メール等、生活環境が広がり、それと共に経験や知識が増えて来ていて、とても感謝しています。ですが、今自分が持っている少ない知識だけで、自信を持ち行動しているところがあると感じています。更に知識を増やし、考え、悩み、迷い、選択して、生きて行ける様になって欲しいと思っています。

学校から

埼玉県立大宮ろう学校は、さいたま市にあります。宇都宮線土呂駅より徒歩5分、大宮駅からバスで15分。交通の便が良い所です。埼玉県には、ろう学校が二つあって、県西部に住んでいる方は坂戸ろう学校、東部の方は大宮ろう学校に通学しています。ろう学校は県内に2校しかないのも、どちらにも寄宿舎があります。大宮ろう学校の生徒数は、193名。全国では、立川ろう学校の次に生徒数が多い学校です。早期教育から、幼稚部・小学部・中学部・高等部、専攻科まで、0歳から20歳くらいまでの人が学んでいます。

H君は重複学級に在籍していて、現在7名の友だち（高1～高3）と一緒に学習しています。重複学級は、教員の数一般学級よりも多いのが特徴です。通訳体制のとりやすい環境です。H君の場合、国語・数学は個別学習、自立・理科・社会は、内容に応じて個別学習と集団学習、体育・美術・家庭科・生活単元学習・作業学習は集団学習を行っており、全ての学習場面で教員の通訳がつきます。通訳は、担任や重複学級担当者、あるいは他の授業担当者が交代で行っています。

通訳についた時に、私たちが大切にしていることは、二つあります。一つ目はH君にとって必要なこと、H君が知りたいことを、わかりやすく伝えるということです。例えば、社会。ゴミについて学習し、廃油石鹼を作ったとき。授業担当者が黒板の前に立ち、ペットボトルに入った廃油を示して「これは、何でしょう？」と、生徒に尋ねます。ろう学校ですから、物の名前の学習は常にやるわけです。この時、H君と通訳者は、他の生徒と同様に黒板の方を向いて座っていますが、指文字で通訳している内容はこんな感じになりました。「

先生が、ペットボトルの中に入っているものが、何か聞いているよ。これは、先週、給食室にみんなで行って、もらってきたものです。コロケや、天ぷらをつくったあと、ゴミになってしまうものです。何が入っているのか、わかりましたか？」...わかりやすく表現してみると、H君が通訳者とともに、授業に参加している。みんなは授業担当者の話を聞き、授業内容を理解しようとしている。通訳者もH君と一緒に授業を組み立て、学習しているということになりますね。

大切にしていることの二つ目は、できるだけ指文字を使って言葉で説明し、H君が日本語で思考できるようにすることです。指文字を使い始めた頃の話は、先程お母さんから話しして戴きました。その頃の担任から聞いた話を付け加えますと、H君との会話の時には、とにかく話し言葉を大切にされたそうです。例をやってみます。これから話すことを全て指文字で表します。昨日は何をしていたの？ えっ、もう食べちゃったの？ 赤くてきれいな花だよ やってみたいの いいでしょう？ 等、細かい語尾まで指文字で表していたそうです。助詞・助動詞・形容詞・形容動詞・副詞・感動詞なども全て指文字で表すことで、豊かな日本語を獲得できたのだと考えています。

H君は日本語をベースにして思考し、点字で文章を書いているので今は指文字を使ってコミュニケーションをとっています。時々、他の教員が手話で通訳すると、その内容を頭の中で言葉に置き換えて、意味を考えている様子が見られます。手話と日本語は語順も、文法も違う、別の言語ですが、現在H君は日本語を獲得しており、日本語で思考し、点字で文章を書いています。そのため、今は指文字を使って伝えているというわけです。でもたぶん今後は、指文字に移っていくのではないのでしょうか？

さて、私はH君が小学部5年生（2001年4月）になった時から一緒に学習することになりました。

その前、小4の3学期からH君が学習する様子を見ていたのですが、文字を読みとる時間がとても長いことが気になりました。文字の大きさ・太さ・コントラスト・書見台の角度などを色々変えてみましたが、一文字読むのに1分ぐらいかかるようになっており、読み間違いや「わからない」と言うことも多くなっていました。どうしたらいいのか、当時の担任団で相談しました。このままの学習方法では、H君の学習意欲を満たすことは難しいこと、明らかに視力が落ちている様子を考えると、将来の楽しみの一つは読書になるだろう、点字の本を読めるようになれば、余暇にも楽しめるし、世界を広げていけるだろう、この結果、小5に進級してまもなく、点字学習を開始することを、本人とお母様に伝えました。

H君は大変意欲的で、4月～7月まで点字に触る練習、9月～タイプライターで書く練習を行い、冬休みには簡単な日記が書けるようになりました。この頃の日記を読みます。

『1月10日木曜日 今日学校で体育でサッカーをしました。体育館でやりました。難しかったから頑張りました。走ったから疲れました。嬉しかったです。図工でたこを作ったけれど頑張りました。上手にできました。また作りたいです。たこが好きです。楽しかったです。』一生懸命書いた様子が伝わってきます。

盲学校との連携は非常に重要です。ろう学校にないものをお借りすることが多いのですが、立体コピーで教材を作成したり、点字本を借りたりしました。今後も更なる支援をお願いしたいと思います。

さて、次に点字の教科書が必要になりました。2001年7月、来年度の教科書として点字本を申請しました。はじめ、県からの回答は「盲学校に在籍していないと点字本は不可能」だということでした。しかし、当時すでに岐阜聾学校では、盲ろう児童が点字本を使用しており、埼玉県でも同様に進めて欲しいと、

県に再検討を依頼しました。そして、2002年4月H君が6年生になった時点で、点字の教科書を注文できるようになりました。今では、制度化されていて、盲学校に在籍していなくても点字教科書を注文することができます。

岐阜聾学校で点字教科書を使用しているという情報は、ここ久里浜で開催された、盲ろう児の合宿で知り合った岐阜聾の先生から教えてもらいました。当時は、この研究会もまだ発足していなかったもので、このような情報は大変貴重でした。何か新しいことを始めようとする時の県の対応をみると、まず前例があるかないかが、問われるようです。前例があれば、他県にならうと言う形で、制度がなくても話をすすめやすくなるようです。本当は、子どもが今必要としている理由や実態を理解してほしいと思いますが...

今日、この研究会の意義の一つには、全国の盲ろう児・盲ろう者の点と点をつなぐ役割があると思います。ぜひ、今日と明日開催されます研究協議会におきまして、有意義な情報交換を行いまして、それぞれの持ち場に戻ったときに活用していただきたいと思います。

さて、点字学習が始まりましたが、ろう学校には点字プリンターもありません。2004(平成16)年1月、保護者と教員で教材等の点訳を外部に委託するように、要望書を提出しました。当時の校長先生には、点訳の必要性を十分に理解していただき、県の費用で点訳料を賄うことになりました。しかも、点訳は石田良子さんに引き受けていただきました。点訳料と言っても紙代だけで、僅かな金額ではありますが、公的な費用でやっていたというのは、本当に画期的なことだと思います。

現在、点訳を依頼しているものは、学級だより・学校だより・保健だより・寄宿舎だより・行事等のしおり・プログラム・文集・点字本以外の教科書などです。これらは、H君にとって必要な情報を、理解できる言葉で点訳してもらっています。他に、国語・数学・社会・理科の自作教材も点訳していただいています。

国語は、H君の興味関心をベースにしながら進めています。例えば、『人と人とのつながり』、H君が、ご両親の実家に行き、親戚の方々や、いとこたちに会った話をクラスで報告しました。「ゆりちゃんのお父さんが...」「小鳥のおばちゃんに...」とH君が言っても、どんな人だかわからない、H君に尋ねてもわからない、お母様に家系図を書いていただき、私が国語の時間に言葉で説明しても、ぴんと来ない、そこで、こんな家系図を石田さんに作っていただきました。名前を書いた点字シールが貼ってあり、名前と名前がテープでつながっている触る家系図です。この家系図を元に、H君と親戚の方々の関係を確認したところ、大変わかりやすかったのです。さらに、「自分から見ると、H克己さんは、父親」「お父さんから見ると、HHは、息子」であることも理解できました。のおじちゃんと呼んでいた人が、お父さんのお兄さんだったり、その方の子どもが、いとこのさんであることも分かってきました。おじ・おば 甥、祖父・祖母 孫など、H君自身が、自分と他者との関係をつかむきっかけにもなりました。

中学部になると、重複クラスと一般クラスの授業はほとんど別になりました。ただでさえ難しい年頃でもあり、中学部教員集団は意識して、一緒に活動する

場面を設定しました。そして2004年中2の文化祭で劇「ロード・オブ・ザ・リング」を、中学部生徒全員で上演しました。例年、一般クラスと重複クラスは別々に取り組みをしていましたが、この年だけ、合同劇を企画しました。H君がビルボ役になり、みんなをつないだ劇でした。生徒同士の関わりが自然と見られるようになり、一緒に楽しく活動し、それを見守る教員もあたたかい気持ちになりました。また、一般クラスでは生徒の「盲ろう体験」も実施されました。聴覚障害以外の障害についても学習を重ね、障害認識を深めることにつながりました。

H君の学年の一般クラスの生徒は、気持ちが優しく、個性あふれる友だちがたくさんいます。H君の動物嫌いを一気に解消してくれたのが、A君です。彼は、生き物が大好きで、中3の9月、学校にアオダイショウを持ち込みました。この時期H君は、まだまだ動物が苦手でした。アオダイショウを見に行くと、かなり大きくて、私もちゅうちょしました。しかし、A君の担任がまたすごい方で、以前別の学校で蛇を飼ったことがあり、「毒はないから、ぜひH君に触ってもらいましょう!」と言って、A君と二人で蛇をつかんでいます。こうなったら、もう触るしかありません。「A君とB先生が蛇を捕まえているから、絶対に噛まないから大丈夫!」とH君に伝えて、一緒に触ってもらいました。

この経験が、修学旅行で奈良に行き、鹿に触れたことにつながります。H君の作文を読みます。原文は点字です。

『鹿にさわったこと 中3 HH』

修学旅行の時に、奈良公園で鹿に触りました。僕は、前に鹿が怖かったです。でも、今は怖くなくなりました。どうしてかと言うと、9月2日に蛇に触ったからです。

鹿が「フーーーーー」と息を吹いていました。僕はびっくりしました。僕が歩きながら鹿をつかまえました。鹿が僕のまわりに集まってきました。西村先生が鹿をどかしてくれました。僕が鹿せんべいを鹿にあげました。鹿が「おいしい。」と言ってくれました。』

蛇に触れたというのは、ものすごい自信になったようです。今では、蚕も自分でつまんで観察します。つぎは、今年11月修学旅行。「沖縄で魚に触ったこと」につながっていくような気がします。一つの核になる経験が、次の経験を広げていく原動力になっていると感じます。盲ろう教育で大切にしたいことの一つだと思います。また、高等部1年の宿泊学習。泊まった部屋にトイレがついていなくて、夜中に一人で行けるかな?と心配しました。翌朝、H君にトイレのことを尋ねると、「C君を起こして、一緒に行ってもらった」。C君に聞いてみると、「Hのことは俺にまかせる!」と言う、頼もしい返事でした。重複クラスにいて、一般クラスの友だちとの関わりが少ないことは事実です。でも一緒に活動するときは、重複クラスの生徒のことを必ず考えてくれます。重複クラスみんなの優しさ、一生懸命さが、一般クラスの生徒にも伝わっていくのかな。何よりも重い子どもを大切にする集団は、他の子どもにとっても居心地が良く、安心して自分を出せる集団だと実感しています。

最後に、学校として今後の課題は、教職員の関心をさらに高めていくことで

す。2004（平成16）年に、校内研究班で盲ろう教育を立ち上げ、早期教育や幼稚部教員と情報交換を開始しました。現在未就学の4名の盲ろう児が通っているのも、お互いの様子を知らせあい、充実した内容にしていきたいと思います。新転任の先生の研修会や、重複部の研究会でも、盲ろう障害について、理解を深めていきたいと思います。また、H君の進路については、進学を考えています。学習の積み重ねが必要な大切な時期であり、そのための時間を確保してあげたいです。通いやすい所でこのまま学習できたら、理想的です。今後、その方向に向けて模索していきたいと思います。

以上、ろう学校からの報告を終わります。

ヘリコプターの会から

私がHさん親子と初めてお会いしたのはもう10年ほど前、H君が小学校2年生の夏でした。

H君との交流が始まってまず感じたのは、H君はいたずらっ子だということでした。そのいたずらはなかなかの知能犯でした。たとえば、大きなボールを転がしあっているとわざとらしくなく、いかにも手が滑ったという振りをして私の居ない方角に転がします。エレベーターに乗ると扉の閉まる直前に、するりと一人降りてしまう。エスカレーターでも、大人が乗ったのを感じ取った後エスカレーターから離れてしまう。信頼できる大人をからかって喜んでいました。いたずらを褒めるわけではありませんが、まだ思うように会話は交わせないうちから、H君が頭の中でくるくるといろいろなことを考えている様子がかがえました。

もう一つの第一印象は、「常にお母様と手をつないでいる」ということでした。このつないだ手で手引きをしているわけですが、お母様にとってはいたずら心で逃げ出さないようにということもあったでしょう。また、このつないだ手でお母様との会話をしているわけです。学校ではこの手が担任の先生に変わります。このことから、H君はお母様と先生以外の人と触れ合うチャンスが非常に少ないということが感じ取れました。

私はH君と会うチャンスがあるとできるだけお母様から引き離して、じかに会話を交わすようにしました。たまたま、指文字通訳を使う盲ろうの友達がいたので、指文字での話しかけはできましたが、指文字の読み取りは初めての経験で慣れるまで大変でした。

具体的に、私が先生やお母様のお手伝いができるようになったのはH君が点字の勉強を始めたときからです。たまたま私は点字を使った年数だけは長かったからです。点字で手紙を書いたり、本を作ったりもしました。でも、初めは点字を文字として読みとれることが楽しいだけで、内容が分かったかどうかは不明でした。点字を覚えたことで、日本語での文章表現は上達していきました。しかし、単語数がまだまだ少ない、また、じかに会話のできる相手がとても少ない、つまり会話の体験が少ないといえます。

あるとき、しばらく一緒に遊んだ後に私が指文字で「では、おわかれします」といいました。H君はきょとんとしています。そこで、手のひらを合わせて、

「バイバイ」と振ってみました。これには納得してH君も「バイバイ」。その時期はちょうど学年末で、学校では「お別れ会」の練習をしているという話をしていたところでした。ですから、「お別れ」という言葉は知っていたのです。ただ、このお別れという言葉が会話の中でさようならの代わりに使うということを知らなかったのです。「H君に多くの言葉を降るように浴びせかけたい」と考えるようになりました。

また、合図としての「バイバイ」を先におぼえてしまうと、同じ別れの挨拶にも「さようなら」「お別れします」「ごきげんよう」などいろいろな言葉に出会うチャンスがなくなります。日本語をしっかりと身に付けるまでは指文字を使うことが望ましいと感じました。

今、H君の表現の中には手話の単語が含まれています。これはあくまでも単語として、ちょうどひらがなだけの文に漢字を入れるような使い方で手話の単語を挿入しています。手話で文章表現をすることはほとんどありません。

中学になってメール交換ができるようになりました。メールは短い言葉でのやり取りが速くできます。手紙と違って会話にとても近いです。手紙だと分からない言葉があっても読み流してしまいましたが、メールだとすぐに「って何のことですか？」と聞いてきます。メールはとても良い会話に慣れる道具として使えました。

もう一つ、メールが大変に役立つことがありました。それは、「メールなら、点字や指文字を知らない人でもH君との会話ができる」ということです。家族と先生だけだったH君の世界を大きく広げる可能性を持っていました。

H家の教育方針というか、ご両親の考えは、「将来、Hがどんなところで、どんな人たちと共に暮らすようになって、皆に愛され、みんなのことを考えられる人になってほしい」というものでした。私は、このご両親の考え方に賛成でした。だからこそ、いまだにH君と一緒にいます。

H君が多くの人たちと触れ合える場を作りたい、これがヘリコプターの会の始まりです。この考えに賛同して、小さい子供から高齢者まで集まってくださいました。もちろん、通訳者ではありませんから指文字も点字も知らない方たちも多いのです。H君と時間と場所を共有して楽しむだけの会です。忙しい人や遠くに暮らしている人は、メールでの会話相手をしてくれます。特別な会話技術を持たない友だちがたくさんできたことで、H君は「ゆっくりでも少しでもいい、何とか相手の言いたいことを聞き取ろう」とする努力ができています。

現在も続けている私とH君のかかわりを上げてみます。学校で出される通信類や授業の資料の点訳をしています。ファックスやメール添付で送られた資料を点訳してH君に郵送します。

H君に毎日定期的にメールを送りたい、でも、毎日となると内容を考えるのは大変なので、手っ取り早いといったルーズな考えで始めたのが「明日の天気予報」です。毎日の繰り返しというのは、発想より継続が大変なことであり、大切なことです。うっかりすると、H君から「まだ、明日の天気予報が来ませんよ」と、先にメールが来てしまうこともあります。

中学生のころに、毎日の簡単なニュースを送ってみようかと考えました。でも、一般知識が少な過ぎて、ニュースだけを送っても理解できないことが多い

ということが分かりました。「どこで地震がありました」「交通事故で何人死にました」こんなことぐらいしか伝えられるニュースが無いのです。たとえば、「高校野球でA校が優勝」、このニュースを送る前に、高校野球というものが長く続けられていて、皆がテレビで応援しているということを知らせる必要があります。「人工衛星打ち上げ成功」、人工衛星って何か、どうやって打ち上げるのか、何の役に立つものかの説明が必要です。「選挙の結果」の前に、国の政治の仕組みについての知識が必要です。選挙の必要性や選挙の方法、政治という言葉の説明だけでも短くは話せません。

ニュースを送るより前に、もっと一般知識を増やしてもらう必要があると感じました。そこで、メールのタイトルを「おはなし」に変えました。ジャンルのない雑学でしょうか。聞き流せばいい「おはなし」です。見えて聞こえていれば、自然にテレビや雑誌、大人の話や友達からの情報でも入ってくるようなことを少しずつ話しました。学校から帰っても、テレビを観たり、漫画を読んだり、ゲームをしたりできないHくんにとっては、メールは楽しい道具になりました。

もう一つメールを使っての遊びで、「しりとり」をしました。お休みの日などには、繰り返しのやり取りができます。このしりとりではできるだけ言葉を選んで、H君が知っているか知らないか、きわどい言葉を選びます。そして、言葉の後に簡単な解説「言葉の意味」を添えました。すると、しりとりの続きの言葉と同時に、H君からも言葉に添えた「意味」を書いてくれるようになりました。これはとても良い遊びながらの国語の勉強になると思いました。

しりとりやメールの中で、指文字で得た言葉に、微妙な間違いがあることが分かりました。しりとりの言葉に「てんじちょうりき」というのが出てきました。「電磁調理器」のことです。指文字では、「テ」を少し横に動かすと「デ」になりますが、H君にとって聞きなれない「電磁」より、聞きなれた「点字」という言葉として聞き取ってしまった。次にH君が指文字で「テンジ」と表すと、こちらも思い込みで「デンジ」と読み取ってしまうわけです。

お正月にヘリコプターの会で初釜を楽しんだとき、お茶を一口飲んだH君が「けっこうなオマエデ」と指文字を表したので、大笑いになりました。ちょっとテ抜きでしたが、これなども指文字での覚え間違いかも知れません。

この点、点字を使うと思い込みは少ないです。反対に、私の点字にはパソコンのミスタッチが多くて困っています。あるとき、「地下室」を「シカシツ」と書いてしまいました。「この間しかしつで、一緒にお茶をのみましたね」。Hくんからの返事には、「お茶をのんだ部屋は、シカシツというところなんだね」と、書いてありました。これから、単語や知識をどんどん覚えていく子供に対しては、間違いは許されないと実感、反省しました。

点字を覚えたのですから、少し練習すれば指点字は使えます。ところが、指点字というものは両手を使います。二人で座ってゆっくり会話を続けるには便利なものですが、動きの多い子供の間は動きながらでも使える指文字の方が使いやすいです。

昨年、お母様が「盲ろう者向け通訳・介助者養成講習会」を受講されました。これがちょっとしたチャンスを作ってくれました。講習会は週に1度、講習が